

しない。全員が経験者ということの強みである。その先の登山道から沢岸へ、単独登山者が5mほど滑り落ちたらしく、首を傾け肩を回していた。どうやら怪我はなかった模様。12時前に千天出合に着くならば、きょうP2まで行くという計画だったが、ほぼ予定通りの時刻になってしまい「今宵ハ、ココマデニ致シトウゴザリマス」とばかり予定通り千天出合にテントを2つ張る。沢の水が使えたので燃料大いに節約。

#### 12月31日(晴のち曇)

へタイム)千天出合6:00 | 渡渉点6:20 | P28:13 | P38:55 | 北鎌のCOL11:43 | P812:20 | P913:00 | 独標14:40 | 独標直下のCOL15:00 (泊)

天気は良いが暖かい。零下7度。アイゼン着装して出発。沢の水量は春より遙かに少ないので、左岸への渡渉も楽だ。急な樹林のP2側稜を登る。木の根がバランスの保持にまことに好都合。小岩壁では少々アイスバインとなっており、荷物も重いのでザイルを使用する。最初、後藤氏が空身で登りザイルをフィックス。次々にブルージックで登る。残置フィックスは切れ

る寸前、いくらも径が残っていなかったの、後続パーティーには注意するよう言った。もともと彼等はザイルは使用せずスイスイ登って来た。やはり、バランスと「心臓」の鍛えかたが違う、度胸がいいチョンガーばかりなのか。P4付近で長い休憩。カモシカのひなたぼっこを目撃。北鎌のCOLに差し掛かったころから雲が多くなってきた。P9を越え、独標を千丈沢側から巻くと、雪壁の上部正面がルンゼ、右が雪稜の様子。先行パーティーはザイルを出し、ルンゼに取り付いている。下部を右へ巻いてみたが判然としないので、とにかく上部へ登ってみる。山田さんが先行パーティーに着いて、かれらと離れて右にトラバースし左上すると、ノーマルなルートがあった。2時を過ぎたらどこであろうと条件の良いところがあれば設営する、ということになっていたので、独標登頂後や下り、鞍部にテントを張ることに決めた。鞍部とはいっても平らではなく、上のテント場はスノーリッジを平らに均し、下のテント場は2メートル程天丈沢側に下って斜面を削った。この先、北鎌平まではまともな幕営地は期待でき

ないだけに、ベストタイミングだった。後続の浜北芳山3名パーティーはこのテント場になり魅せられていた様子だったが、なんせ余地がなく、先に進んだ。夕方から吹雪が強くなり、夜半にかけて何度かテントの除雪をする。下のテントは吹き溜まりにあるため、すぐに埋まってしまう。上のテントは風当たり最高で、フライシートが捲かれていた。

#### 1月1日(吹雪)

##### へタイム)停滯

日本海に発生した低気圧の影響で荒れ模様。停滯を決める。日程的にもまだ余裕がある。食糧、燃料の残量をチェック。後藤氏のアマチュア無線で松本芳山の三村氏に連絡をとり、留守本部に、本日は停滯するという電話を入れてもらう。下界の正月のようすなども知りたいのが人情。留守本部からのメッセージを期待したが、「とくにメッセージはありませんでした」とあっさり言われてしまった。吹雪の中、板橋芳山の5名が通過。正気の沙汰ではない。他のパーティーは皆停滯。他に通過する者は1人もなかった。

#### 1月2日(快晴)

へタイム)独標のCOL6:30 | 北鎌平8:30 | 槍ヶ岳9:48 | 10:15 | 槍の肩10:35 | 47 | 槍平12:45 | 13:20 | 穂高平小屋15:30 (小屋泊)

風は強いが晴れている。テント場が狭く、「キジ撃ち」が難しいとの要望に応じて、伸和工務店施工による、快適無風トイレを天丈沢側斜面に建設。上空に星がきらめく常念岳を愛でつつ、各自、朝の御用を足した。テント撤収が容易だったので6時に出発。しかしヘッドランプで照らすルートは今一つはつきりしない。岩場に突き当たって引き返す。一旦、設営地に戻りルートを探す。この間、山田さんは紛失したカメラをテント場の雪中から掘り当てた。30分ほどのロスタイムの後、千丈沢側の沢状のルートを下り、稜線の千丈沢側を巻きながら北鎌平に達する。天気はいいし、1日の停滯のあとなので全員元気だ。それでも高度が増すにつれ若干、歩みはゆっくりとなる。槍への登りはかなり急な雪壁で始まり、上部は易しいが足もとがスパッと切れ落ちて高度感がある岩場だ。ここをア